

【出初式の歴史】

出初式の起源は、江戸時代の火消による出初（でぞめ）・初出（はつで）といわれ、江戸時代の万治二年（一六五九年）一月四日、江戸の上野東照宮で定（じょう）火消によって行われた出初が始まりと伝えられている。

江戸時代の江戸では火事が頻発したため、江戸幕府によって消防組織である火消が制度化されていった。まず制度化されたのは武士による火消（武家火消）であり、寛永二十年（一六四三年）大名に課役として消防を命じた大名火消が制度化された。しかし、明暦三年（一六五七年）に発生した明暦の大火では火勢を食い止めることが出来ず、江戸城天守閣を含む江戸の大半が焼失、三万人から十万人と推計される犠牲者を出し、江戸の歴史上最大の被害となった。そのため、明暦の大火翌年の万治元年（一六五八年）幕府直轄の新たな消防組織として、定火消が制度化された。四千石以上の旗本から四名（秋山正房・近藤用将・内藤政吉・町野幸宣）が選ばれ、臥煙（がえん）と呼ばれる火消人足とともに火消屋敷（消防署の原型）に居住し、消防活動を担当することとなった。

翌万治二年一月四日、老中・稲葉正則に率いられた定火消四組が上野東照宮に集結し、氣勢をあげた。

この行動が出初と呼ばれ、明暦の大火後の復興作業に苦しんでいた江戸の住人に対し、大きな希望と信頼を与えた。以降、毎年一月四日に上野東照宮で定火消による出初が行なわれるようになり、次第に儀式化していった。出初は大名火消によっても行われ、派手な装束と勇壮な活躍で知られた加賀鳶の出初では、梯子の曲乗りが衆目を集めた。

明治維新後、明治八年（一八七五年）一月四日に第一回東京警視庁消防出初式が行われ、明治三二年（一八九九年）には「消防出初式順序」が制定された。昭和四年（一九二九年）一月六日には昭和天皇臨席のもと、特設消防隊と全国消防組の親閲式が行われている。



江戸の華、い組の纏（歌川芳虎 画）